

Lewis, D., 2008, "Using Life Histories in Social Policy Research: The Case of Third Sector/ Public Sector Boundary Crossing," *Journal of Social Policy*, 37(4): 559-578.

D. ルイス, 2008, 「社会政策研究にライフヒストリーを用いる——サードセクター/公的セクターの境界交差の事例」

#### 序文 (pp.559-561)

- 本稿の課題は、「サードセクター」と公的セクターの関係の重要な側面を解明する方法を示すことを通じて、社会政策研究におけるライフヒストリー法 (life-history method) の適切さを例証すること。
  - 本稿において著者は、上記 2 つのセクターのあいだを横断してきた個人の経験にもとづくライフヒストリーが、セクターの境界の性質やそうした境界の概念化の背後にある前提についてよりよく理解することや、諸個人の境界をまたいだ移動を統治の形態の変化のなかに位置づけること、またセクターの境界を超えた影響力や吸収といった論点の考察に資すると論じる。
- ライフヒストリーとは、Watson と Watson-Franke (1985) の定義によれば、ある個人がみずからの人生の全体もしくは一部について、書面もしくは口頭で、別の人から引き出されたり促されたりしながら発する回顧的な語りとされる。
  - 1980 年代に、「ボトムアップ」の新しい歴史的パースペクティブを探求するオーラルヒストリー運動や、フェミニスト研究者による女性の「隠された語り」を取り戻す試み、研究対象の「エンパワー」を望むアクションリサーチャー、患者のよりよい病歴を得ることに関心を寄せる医学研究者、大きな物語の解体と社会生活の多様な記述に価値をおくポストモダニストなどによって、いくつかの分野で再登場した。
  - しかし、ライフヒストリー法は、社会政策の主流において、またサードセクターや非営利団体の研究においても、ほとんど用いられていない。本稿では、政策過程を理解する手段として公務員やサードセクターの専門職の日々の経験を分析する研究に対して貢献することが目指される。
- 上記のような問題に関心を寄せる著者の研究経歴：
  - 1990 年、フィリピンにおける NGO と政府の関係についてのフィールドワークの最中、多数の NGO を基盤とする活動家が政府部門に渡っていることに気づく。
  - 著者はこの現象が、政策策定者によって用いられてきた制度的秩序の支配的モデル（すなわち国家・市場・市民社会）に異議を唱えるものであるように思われ、関心をもつように。

### ライフヒストリー法：短評（pp.561-563）

- ライフヒストリー法が社会政策研究にもたらしうる 4 つの強み：
  - ①高い水準の歴史的奥行き（historical depth）とエスノグラフィックな詳細を提供する。その結果、政策のナラティブに関する理解を「再歴史化」する可能をもつ。この点は、強力な政策アクターがみずからのアイデアを斬新なものに見せるために歴史を軽視する場合があるという理由から重要である。
  - ②社会科学における構造と主体の結びつきに関する難問を前進させる可能性をもつ。
  - ③研究プロセスを人間らしいものにするに資する。また、社会的アクターの主体性を強調することで、コミュニティの周縁におかれたグループに発言の場を提供しうる。
  - ④確立された知識を覆すようなニュアンスに富む説明を生み出すことで、一般に受け入れられた常識に異議を唱えることが可能。
- 他方、ライフヒストリー法は 4 つの弱みをもつ。
  - ①研究者はたんに「声を届ける」だけでなく、実際には何を取り入れて何を取り出すのかを決定し、素材をどのように枠にはめるのかについても重要な決定を行う。
  - ②ライフヒストリーのデータから一般化することは困難。
  - ③インフォーマントと研究者の共同で産出される主観的な説明におけるデータの汚染（contamination）の問題。ライフヒストリー法を擁護する立場からは、そうしたバイアスは避けられないものの、この手法の強みは、権力の問題についての反省を要請する点にあると主張される。
  - ④（研究にかかる時間など）研究者とインフォーマントの双方に多くを要求する。

### 英国でライフヒストリー法を用いる：着想と知見（p.563）

- 英国のライフヒストリーデータから得られた知見について議論するに先立ち、以下では、データ収集を行った研究プロジェクトを特定の文脈に位置づけると同時に、後段で用いるライフヒストリーの種類について述べる。

### 研究の背景（pp.564-565）

- 政府・民間・「サード」セクターという 3 セクターのアイデアは、社会科学の研究者が用いる理論モデルとして確立している。また、政府や資金提供者らが政策を体系化するのに役立つ政策モデルとしても機能するようになっている。
  - 3 つのセクターを区別することは分析的には都合がよい反面、現実はより複雑である。したがって、そうした政策モデルのあいだの関係や、モデルが表現し影響を与えようとする現実について検討することが研究上の課題となる。

- 境界交差（boundary-crossing）の研究は、サードセクターと公的セクターのあいだを移動する個人の経歴と経験から学ぶことを目的としている。
- 調査のプロセス：
  - 合計 20 名のセクターの境界を移動した個人を特定し、ライフヒストリーを作成。このプロセスでは、Glaser と Strauss（1967）が提示した「目的論的」あるいは「理論的」サンプリングのアプローチに従う。
  - インタビュー対象者は、調査者たちのかつての同僚や友人から出発して雪だるま式に特定。インフォーマントは、境界交差の主要なタイプをもっともよく描けるような広がり確保することを目指す。
  - インタビューは主に都市部の中産階級のインフォーマントを対象に実施。可能なかぎり、民族的背景、年齢、性別のバランスをとるようにした。
  - ライフヒストリーは、1～3 時間の録音されたインタビューのなかで収集。はじめの問いかけを除き、インタビュアーの介入は最小限にとどめた。
- ライフヒストリーの概要
  - 女性が 12 名で男性が 8 名。平均年齢は 40 歳代後半から 50 歳代前半。3 名が少数民族のコミュニティを出自にもつ。
  - 8 名が公的機関やサードセクターの国際開発部門で働き、10 名がイギリス国内のボランティアセクター<sup>1</sup>で勤務。両方の部門で活動していたのは 2 名のみ。

「生活・活動歴（life-work history）」：ライフヒストリー法を適用する（p.565）

- セクターの境界交差を調査するため、ここでは仕事の経験（公式のキャリアや活動、ボランティアなど）をライフヒストリーの中心に位置づける。
  - その結果、用いた手法は純粹なオープンエンドのライフヒストリー法ではない。

### 英国データから得られる説明に役立つ研究上の洞察（p.566）

- 英国においてセクターの境界を横断して移動する個人のライフヒストリーからは、文脈上の洞察（contextual insights）と個人レベルの洞察（individual-level insights）という 2 種類の論点が浮かび上がった。

---

<sup>1</sup> ボランティアセクター（voluntary sector）とは、イギリスにおいて民間非営利部門を指す用語として使われており、ここでのサードセクターとほぼ同義である。

文脈上の洞察（pp.566-570）

- 生活・活動歴に関する語りは、各人の経歴の出発点や、それがより広範な政策変化とどう関係していたかを教えてくれる。
  - コミュニティや国際開発の分野での活動の語りをより幅広い生活の文脈のなかに位置づけることで、過度にセクターに焦点を当てているように見える既存のサードセクター研究のものの見方を「解き放つ」ことができる。
  - 例：英国のボランタリーセクターの歴史においては、その初期における地方自治体との仕事が、その後のサードセクターの活動にとっての出発点として重要であったという事実が軽視されてきた。
- また、政治的・経済的な要因が、境界を横断して移動することを魅力的な選択肢にした。
  - 経済面では、公的セクターの報酬が相対的に高い傾向にあることが、とくに個人の人々の経歴の後の段階における移動の重要な要因となっていた。また、公的機関で新たな仕事を得る機会が拡大することが、サードセクターからの移動を促すこともある。
  - 政治面では、とくにブレア政権下における出向（secondment）の一般化という形で、サードセクターから政府への移動が強化されていた。
- セクターの境界を横断した人びとは、立ち位置の変化に基づいてみずからの見方を変化させ、結果的にセクターについての一般的な固定観念に異を唱えるようになる者もいた。
  - サードセクターで長らく活動してきた者のなかには、公的セクターへと移動することで、政府の現実に対するサードセクター側の理解の不完全さについての見方を転換させる者もいた。逆に、境界を横断することで、公的セクターとの不満足な遭遇の結果として、サードセクターのアイデンティティが発見／強化される者もいた。
- 両セクター間での「交流」の増加は、公的セクターの人びとに対し、サードセクターについてのより正確な知識を提供する（逆も然り）というポジティブな効果をもたらしている可能性がある。
  - 例：現政権や野党の政治家の多くは、みずからの生活・活動歴の一部にサードセクターでの活動を含んでいる。
  - こうしたことは、サードセクターのますます重要になりつつある機能の 1 つとして、将来の政治的リーダーの訓練の場としての機能があることを示唆する。
- 人びとの活動・生活歴は、経歴の初期段階に形成された友人関係やネットワークがその後も持続し、見えにくい形でサードセクターと政府の関係に影響を与え続ける方法を明らかにする。

- 例：あるインフォーマントが「ex-fams」と呼んだ人びとの役割。これは、かつて Oxfam GB という団体に働いていたが、現在は政府の役職についている人びとのことを指し、政府とサードセクターの関係を背後から円滑なものにしているという。

#### 個人レベルの洞察 (pp.570-573)

- 境界を横断することへの個々人の動機に関しては、2つの典型例が見出された。
- 「役割に基づくアイデンティティ」：仕事に従事することに優先順位をおく。このような人びとにとって、選ばれた職場としての好ましいセクターといった概念や、特定のセクターにおける考え方やそこでの価値に対する特別な忠誠心は存在しない。
  - たとえば、50代半ばの女性のインフォーマントは、2つのセクターの対照的な特徴についての単純な一般化や前提に抵抗して、両セクターの長所と短所はともに、より広範な政治、政策、組織の構造に大きく依存しているとみなしていた。
  - 他方で、公的セクターとサードセクターでさまざまな仕事を経験してきた別のインフォーマントは、2つのセクターの双方を経験し理解することで、独特の貢献をなすことができたと言っていた。この語りからは、境界の交差が、境界のあいだを行き来する一連の動きとしてのみならず、さまざまな位置やネットワークの蓄積として捉えられることを示唆する。
- 「セクターに基づくアイデンティティ」：個々の移動の選択は主にサードセクターへの帰属意識に基づくが、政策により効果的に影響を与えたり、のちに有益な教訓をサードセクターに持ち帰ったりするために、公的セクターに探索的または実験的に滞在する。
  - このような者は、「セクター」の概念を自らの専門職アイデンティティの中核におく傾向にある。
  - 他方、こうした強いセクター意識をもたない人びとは、政府内での役割に満足ようになる可能性が高い。また、ときにこれらの人びとは大きな変化を経験して、新たな視点からサードセクターを見たときのその限界に気づくこともある。

#### 結論 (pp.573-575)

- この論文では、サードセクターと政府のあいだの複雑で流動的な境界線を構成することに寄与する活動家や官僚の日々の経験や実践を深掘りする手段として、ライフヒストリー法が擁護された。
  - それゆえに、ライフヒストリーは、社会政策にとって有用な追加的な研究手法とみなすことができる。この手法は、理解を深めたり、旧来の前提に異議を唱えたり、組織のアクターや政策展望についての過度に一般化されたイメージを構成する実証主義的アプローチに依存する傾向に対抗することができる。

- ただし、同様に重要なのは、ライフヒストリー研究における語りの構成が、研究者とインフォーマントの共同プロジェクトであるということ。
  - 本論文の事例でいえば、セクター間の境界交差への関心は、それまでの著者の生活・活動歴から派生したものであり、その結果として、データにある程度の汚染（contamination）が生じた可能性がある（例：数名のインフォーマントはみずからの経歴についての「セクター化」された見方を明らかに欠いているとみなされた）。
  - しかし、セクターが重要であるという見方に対するこうした拒否は、研究の射程を制限するのではなく、むしろ「セクター化されていないアイデンティティ」というカテゴリーを構成することによって、それを認めることが可能となった。
  
- 生活・活動についての語りは、「NGOの活動家」や「政府の役人」といった旧来の単純化された見方に異議を唱えるような洞察を提供する。
  - 政府部門とサードセクターのあいだを横断する人びとのキャリアパターンや経験や関係性に焦点を当てることで、英国における政府とサードセクターの関係のよりニュアンスに富む理解を提供する可能性がある。
  
- また、この手法は、人びとの労働生活の詳細だけでなく、それらが広範なカテゴリーや価値をどのように強化したり、それと矛盾したりするのかについても示してくれることから、これまで受け入れられてきた常識に異議を唱えることを可能にする。
  - 政策のレベルでは、（国家・市場・市民社会という）政策過程の支配的な3セクターモデルというカテゴリーを問題化するのに役に立つ。